

井戸を埋める

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 大石を入れた井戸 平安京左京八条二坊十四町

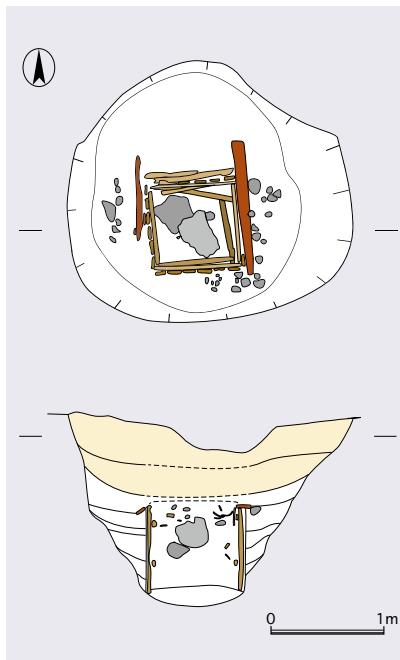


図1 写真1の井戸の実測図

井戸の作り方については『リーフレット京都』76で触れました。そこで今回は「井戸を埋める」ことをテーマに考えてみることにします。

古来より井戸には神霊である井戸神が宿るといわれています。そのため井戸を作る時や埋める際には、井戸神を祀る様々な祭祀や儀式が数多くみられます。

井戸の埋め方で現在もっともよく知られているのは、節を抜いた竹筒やパイプ類を立て、井戸神の出入りのための「息抜いきぬき」を作って埋める方法です。しかし、発掘調査例を調べていくと、井戸を埋める方法はほかにも多くの種類があることがわかってきました。

このなかで「大石を入れた井戸」

が、廃棄に関する祭祀・儀礼の痕跡ではないかと考えられる例を紹介してみましょう。

大石を入れた井戸 平安京左京八条二坊十四町で発見された井戸(写真1・図1)は、検出時、一辺2.6mの隅丸方形でした。上層には深さ0.8mの土壌状の掘り込みがあり、井戸の掘形とは趣が異なっていました。その下層で見つかった木製の井戸枠は縦板を方形に組んだ型式で、一辺が0.8mあります。井戸の底には銭貨が2枚あり、残存する井戸枠内の上位には、一抱えほどの大石2個が井戸を一杯にするかのように据え置かれていました。縦板の上端部では板材1枚が井戸枠に重なっている状況で記録されています。発見された時点

で2～3枚の板材が井戸を覆っていた事と、上層との差異を兼ね合わせて考えると、この面で蓋をしたようです。出土した遺物から鎌倉時代に埋めたものと思われます。

埋められた順序 この井戸が埋められていく過程にそって3段階にわけ、他の類例も交えた廃棄の様子を考えてみましょう。

1、井戸の周囲を掘り込んで井戸枠の一部を除去する

こうした類例はたくさんあり、井戸枠の抜き取りにともなう掘り込みと考えられています。ただ、すべてがそうであるとは言い切れず、縦板組井戸枠の場合、板材が全部抜き取られてはおらず、切断されたり折られていることがあります。しかも、ちょうど上層の土壌の底面で消失し



写真2 土器皿出土 平安京右京二条三坊九町
花園大学構内調査報告 同大学考古学研究室 1998年



写真3 石仏出土 平安京左京三条三坊十一町
平安京跡研究調査報告第12輯 (財)古代学協会 1984年



写真4 大型の土器片出土 平安京右京七条二坊十二町



写真5 拳大のグリ石出土 勝龍寺城跡
勝龍寺城跡発掘調査報告 長岡京市埋蔵文化財センター 1991年

ている状態で見つかる例が多いのも偶然とばかりはいえず、何かを意図していたようです。これは石組井戸の場合も同様です。

2、井戸を埋めながら残存する井戸枠内の上位に大石を据える

写真1では長軸が0.5m前後の石を据えるようにしており、比較的平坦な面を上にして置いた様子が見て取れます。いずれも井戸の最下部ではなく、ある程度埋められた段階で置いたようです。

同じような例として、大石の傍らに2つの土器の口を合わせて置く(写真2)、石仏を上に向けて据える(写真3)、大型の土器片を置く(写真4)こともあります。

3、土砂で一杯にした井戸を板材で蓋をした後に地表まで埋める

板で蓋をした痕跡を明確に示す例は写真1のみです。その後、土砂で地表まで埋めます。

また、拳大のグリ石で埋めて平らにしたり(写真5)、多量の土器で埋めもどす例もあります。なかには最後に埋まった段階で大甕などを据え付ける場合もあります。

まとめにかえて 大石を井戸枠内に埋めはじめた時期については、まだ結論を出すことはできませんが、遅くとも長岡京の頃にはすでに出現しています。室町時代の類例がもっとも多く、江戸時代初頭までは続けられていた可能性もあります。

こうして見てきたところ、井戸を埋める際には何らかの意図や畏怖が作用していたことは、どの

段階においても顕著に現れています。なかでも3は「これでもか!」とでもいうべき強い意志が働いているように思われます。特に2では「大石を井戸に埋める」ことが重要であるとの認識があったようです。土器を石の横に置いたり、井戸枠内を石でふさぐようにしているところからも、井戸を埋める際の祭祀に関連していると見なせます。これらは、竹筒を立てるのとは異なるもうひとつの作法ではないかと考えることができるでしょう。

すなわち「息抜」とは逆の発想で、井戸神を「封じ込める」という意識のもとに行なわれた埋め方であることがわかります。

(久世 康博)